

小説 Air

あの日のうつむいていた私に風を送ることができるだろうか。私は Air と入力した。

「言いたいことは分かる。でも、一番大事なのは君自身の身体だから。今は人形になったつもりでやり過ぎすといい」

「わかりました」

通話を切り、スマホの画面にべっとり付いた皮脂を服で拭き取る。席に戻らず、そのままトイレへ行った。洗面台に顔を突っ込み鳴咽をする。見上げると、鏡に映る私と目が合う。人形になるか。

たしかに余計なことを考えているから苦しいのかもしれない。捨てよう、思考を。

個室のトイレトペーパーを破り取り口元を拭う。いつまで続くのだろう。個室の壁にある貼り紙を眺めながら、捨てたはずの思考をやはり始めてしまう。

「長時間のご利用はお控えください」

ん。続けて何かが書いてある。

「見せてくれた宝物は捨てたんだね今は今の大事なものがあるんだね」

個室トイレの注意書きにこんな標語みたいなものが書かれるだろうか。そして、何が言いたいのだろう。トイレで捨てる？ たしかに今トイレトペーパーを便器に捨てたが。家庭ごみの持ち込み禁止のことだろうか。

スマホがポケットの中で震える。取り出して画面を見ると「若手」の名前だ。少し気が重くなり電話を取る。

「今、大丈夫ですか？」

「ああ、ごめん。ずっと行けなくて」

「その様子だとまだ難しそうですか」

「ごめん。何かあったか？」

本来なら私が現場にいなければならない。にもかかわらず、私は現場にいない。現場は大変だろ

う。彼も困惑してるはずだ。現場には現場特有の暗黙のルールがある。しかし、ガイドラインがあるわけではない。私は彼の質問に、このときはこうしてくれ、そのときはこうしてくれ、と答えて通話を切る。

私はなぜここにいるのか。本当なら現場にいたべきだ。でも、「大人」たちがそれを許さない。抗議してみたものの、彼らがどこかの会議室で長時間話し合った結果決まったことらしい。彼らにとってはこちらの方が「緊急事態」であり、私が担当していた現場は「調整可能」とのことだ。そう判断して「大人」たちは「若手」を調整した。少なくとも私にとってはこちらの方が「調整可能」であり、何も知らない「若手」が急に任された現場の方が「緊急事態」だが、こう思うのは私だけなのかもしれない。

一旦忘れよう。明らかに間違っていると思うが、誰に言っても論されるばかりだ。客観的に見れば私が間違っているのだろう。私はどうやら過剰に拒絶反応を起こしている。そう人形になればいい。よし席に戻ろう。心を無にして業務を遂行する。洗面台で手を洗い、トイレを出ようとしたとき、また文字が目に残った。

へキレイだったものはぼくが憶えてる君だけに差す光が見えなくても

ハンドソープのボトルに小さな文字で書かれていた。目元が熱くなる。私が捨てることも忘れることもできないでいるこの苦しみを私だけが必死に守っていたが、誰かが憶えてくれるのかもしれない

ない。光が見えていないだけで差し込んでいるのかもしれない。

席に戻り、私はこの「緊急事態」に集中した。

この「緊急事態」にここぞとばかりに「大人」が集まっていた。いや「駆け付けていた」。この苦難を乗り切ろうと意気込んでいる。「若手」が買い出しから戻ってきた。「大人」から頼まれたのであろう。両手にはパンパンに膨れたビニール袋を持っている。袋の中には発泡スチロール製の容器に入った牛丼が詰め込まれている。

「緊急事態」であるにもかかわらず「大人」たちは楽しそうだ。現実には大したことは起きてない。でも、一部の「大人」が騒ぎ立てた。だから「大人」たちが集まったのだ。すべての行動を監視して、すべての行動を台帳に記載して、こうするべきかあするべきかと延々と話し合っている。もともとこちらの現場を担当していた者はそれに振り回されている。かわいそうに。

「終電も気にしないでいいぞ。ホテルに泊まってもいいから」

皆、ホテルに泊まることのできたらいいのに、とも思っていたのだろうか。ありがたいございます。助かります。という声が聞こえた。室内には牛丼のにおいが充満している。さっきまで怒号を飛ばしていた「大人」は今では大声で笑っている。そして、周囲も笑っている。私は拒絶する喉元に牛丼をお茶で流し込んでいた。笑う余裕はなかった。

ビジネスホテルでカードキーを受け取り、エレベーターに乗る。気持ちが悪い。あそこでどうして私は笑うことができないのだろう。どうしてありがとうございます、と言えないのだろう。きっと皆だつて心からそう思っているわけではない。でも、いちいち心は乱されずに言葉を差し出せるのだろう。彼らのその強さ、そして、この動悸や鳴咽の原因である自分自身の弱さがたまらなかつた。部屋に入ると、テレビが付いていた。といっても、番組が流れているわけではなく、このビジネスホテルのサービスの案内のようなものが表示されている。着替えながらそれを眺めていた。

〈君らしいまんまだなんにも無駄じゃ無いなりたい姿をあきらめきれないまますり傷だらけ変わってないなあ けれどどこか強く〉

文章が画面を右から左に流れていた。何だろう今の文章。「けれどどこか強く」。私は朝の通勤ラッシュ時の人混みの中にいるひとりの人物を想像した。ほとんどの人たちはある方向に向かって速足で歩いている。でも、その人物はただただ立ちすくんでいる。だから、皆の妨げになっていて、たくさん衝突されていた。彼らは口にはしないが「どけよ」「邪魔だよ」という表情をしていた。いよいよその人物は転倒して傷だらけになっていた。うずくまる弱々しい背中はずかしく強く見えた。また、ビジネスホテルと関係のない文章が画面に流れている。

〈傷ついたお蔭の強さかは知らない 夢中になれる君だけ見て来たから〉

電灯を消してベッドにうつぶせになる。私は声を枕に向かって漏らして、そのまま寝た。

ビジネスホテルに宿泊しながら「緊急事態」の対応をするという生活はしばらく続いた。いつまでこれが続くのだろう。このことを繰り返しながら、今日も「緊急事態」の対応をしていた。毎朝、嘔吐するのも慣れてきた。午後になればある程度は落ち着く。時間はかかったが、こうやって人は人形になれるのかもしれない。

スマホを覗くと、現場を任せてしまっている「若手」から着信が一件あった。気付かなかった。急いでかけ直すと、ワンコールも終わらないうちに彼が出た。

「どうした？」

「すみません、何度も電話して」

明らかに「緊急事態」だった。そして、私が現場に行かないとどうしようもない。さすがにこの「緊急事態」は伝わるだろう。「調整可能」ではないことも伝えられるだろう。そう思って、「大人」たちに相談した。

「え？　でも、こういうときのために若手を調整したんじゃないの？」

「そうなんですけど、この場合は私でないと難しくて」

「どうにかならないの？　電話で指示しながらとかさ」

ならない。というか、あなたたちの言う「緊急事態」はなぜ「調整可能」ではないのか。私にそれを証明する必要がなぜあなたたちにはないのか。「大人」たちが延々と会議して決めたからと言って何なのか。ダメだ。また吐きそうになる。呆れた口調を隠さないまま、無理だとは思いますが一旦調整してみますと言って席を立った。

私は個室トイレの中で嘔吐してしばらく放心していた。ふとまた貼り紙が目に残る。

「乗り越えなきゃ」って塞がず目を開けて欲しいんだあの日の未来の君なら」

涙が止まらなかった。ここ数日の間、このような奇妙な文章をあちこちで目にした。バス停横の案内板には施設の紹介の文章の中に「なれなかったものがいくつもあるならその余熱が君を今日へ進ませた」と書かれていたり、コンビニで陳列されている雑誌の表紙に「忘れられることも救いというなら今日のつらさもさっぱり忘れるんだろう」と書かれていた。

私がかろうじてすべてを投げ捨てずに踏みとどまっているのは、この文章のおかげだった。どこかに私のことを見てくれている存在を感じていた。そう思うようにしていた。私は決心した。ここを抜け出して現場に行こう。

「最小限生きるための夢も抱きしめゆらぎの中の今を見つめて走る時を進め」

自動販売機の取り出し口の上に貼られている缶コーヒーの広告に白文字でそう書かれていた。不思議と勇気が湧いてきた。スマホが震える。画面を見るとアプリから通知がある。

〈大丈夫 君は 大丈夫〉

通知を長押しすると「返信する」が選択できた。私はなぜか驚くことなく返信を入力して送信をした。そして「大人」たちに「現場に向かいます。何かあったら電話してください。いくらでも答えますから」と返事も聞かずに外へ出た。奇妙な文章を見るのはそれが最後だった。

今年もあつという間だった。紅白歌合戦が終わって、NHKは全国のお寺を映している。今年を振り返るナレーションと鐘の音。この光景を見ると、私はあの年の大晦日を思い出す。たしかビジネスホテルに向かう道中で年を越した。意を決してあの生活を抜け出したのは、たしか11月のことだった。

もう何年も前のことだけど、今の自分があるのはあのとときの自分のおかげだと改めて思う。あのまま、あそこに残り続けていたらと思うとゾツとする。あの日以降、私は腫れ物のように扱われたが、代わりに自由を得た。

テレビをザッピングしていると、Airを特集していた。今年最も話題になったアプリだ。私も名前は聞いたことあったし、関心もあった。でも、よく分からないままだった。

時間を逆行する素粒子による通信技術を基盤にしたメッセージアプリらしい。世界中にいくつか点-inしている加速器のリソースを借りる関係で、送信できるメッセージの文字数の制限と回数の制限は厳しい。過去にメッセージを送るとはどういうことだろう。テレビであるその仕組みを説明していた。

「何か好きな短い言葉を言ってください」

「じゃあ「よいお年を」で」

番組観覧客がそう答えると、解説者らしき人物がスーツの内ポケットから封筒を取り出す。

「開封してください」

観覧客が封を破ると、中に折りたたまれた紙が入っている。観覧客がそれを開くと驚いた顔をして、カメラに見せる。そこには活字で「よいお年」と書かれていた。昔からよくある予言のマジックに見えたが、仕組みは同じらしい。

「Airは過去の文字が入力されている印刷物に文字が入力する場面に干渉することができます。しかし、任意の文字に干渉できるわけではなく、過去の《誤植》のあった印刷物にのみ干渉することができます」

私には仕組みを十分に理解することはできなかったが、いずれにしても過去の誰かに直接メッセージを送るのではなく、特定の時期の印刷物の《誤植》に干渉することでメッセージを送るらしい。たしかに、ここ数年で過去の印刷物は、書籍に限らず、商品のパッケージや広告など、あらゆる印刷物が検索可能だった。そして、Airの「宛先」には過去の印刷物の中から指定するらしい。

そのメッセージは「メッセージ」ではなく「Air」と呼ばれていた。日本では「風を送る」という言い方が定着しているらしい。たしかに「メッセージ」というほど確実に届くわけではないし、送りたい人物の周囲に「メッセージ」を置くという形式に当てはまる言い方だと思った。

あの日の洗面台にうつむいていた私に風を送ることができるだろうか。そう思って、アプリストアの検索窓にAirと入力した。インストールしてアカウントを作成する。ログインをしてみると、受信箱に一通のAirが届いていた。件名は「Re: 大丈夫 君は 大丈夫」だった。